

# 小学校音楽科教材にみる「かごめかごめ」の変遷

## Children's Song “Kagome, Kagome”

— a study of its popularization into a school song

嶋田由美

SHIMADA Yumi

2003年10月9日受理

### 1. はじめに

「初等音楽科教育法」などの講義時に学生に「子どもと遊べるわらべうたを知っているか」と問うと、多くの学生が「かごめかごめ」を挙げる。しかし実際にこの曲を歌わせてみたりその歌詞を書かせてみるとうろ覚えであったり、曖昧さから耳で聞き覚えた様々な歌詞に置き換えて歌っていることがわかる<sup>1)</sup>。また遊びの種類も、一般的な背後の人あて遊びの他にも僅かではあるが、「なべなべ」と同様の遊び方、橋くぐり、或いはなわとびなど他の遊び方を記憶している者もいる。学生のこのような異なる体験をもとにわらべうたの伝承性を論じ、時代や地域による歌や遊び方の相違とその変遷に気づかせることは、学生の「文化の伝承と創造」に対する考え方の礎を築くという点で意義深いものであると考えられる。

一方、実際の教育や保育の現場におけるこれらのわらべうたの扱い方をみると、教科書や曲集に教材として提示された形の定まったものをわらべうたとして扱い、子どもたちに教授している場面が多く見受けられる。学習

指導要領（音楽）で例えば「ひらいたひらいた」などのわらべうたが、共通教材として提示され<sup>2)</sup>、教科書に掲載されることはこうした現場の傾向をさらに加速させるものだと考えられる。そこには教師自身の内に、わらべうた本来の地域性や時代性への気づきが見られず、形の定まった教材としてのわらべうたを教授することによって、わらべうたの定型化をさらに推し進めているような趣さえ感じられる。

このような状況を鑑みると、教員養成における学生への指導に際しても、わらべうた本来のあり方と上記のような教育現場における扱われ方とのギャップを認識させ、何をどのように教えるかということを明確にし、その上にたった教材選択の視点を持つことの大切さを学ばせていくことが急務だと思われる。

本研究はこのような問題意識から、近代学校教育が確立された明治期から今日に至るまでわらべうたが主に小学校音楽教育の中でどのように位置づけられ、教材として扱われてきたのかを、「かごめかごめ」を中心に考察し、わらべうたの教材化を考える上での視座とすることを目的とする。

## 2. 明治期の唱歌及び遊戯教材にみる「かごめ」

わらべうた「かごめかごめ」のルーツを探ることが本研究の目的ではないが、このわらべうたがどのように伝承されてきたのかを大まかに捉えておくことは本研究の性質上、必須の課題であると考え。現在の「かごめかごめ」は、太田全斎著『諺苑』(1797年)や釈行智『童謡集』(1820年)などによると江戸期には既にその原型が見られるようである。その原型とは例えば『諺苑』所載の、

籠目々々、籠ノ中ノ鳥ハ、イツイツデヤル、  
ヨアケノ晩ニ、ツルツルツツベエッタ、鍋  
ノ鍋ノ底ヌケ、一升鍋ノ底ヌケ、底ヲイレ  
テタモレ<sup>3)</sup>

という歌詞や、『童謡集』中の、

かごめかごめ。かごのなかの鳥は。いつ  
いつでやる。夜あけのばんに。つるつるつッ  
ぺエつた。なべのなべのそこぬけ。そこぬ  
いてたアもれ<sup>4)</sup>

という歌詞から見る限り、「なべなべ」のくぐ

1) かごめく  
此あそびは、みなく手をひかれて、おになり、  
かごめく、  
かごなかへとは、  
いつくねず。  
よあけのまへに、  
つるつッぺエつた。  
トいつて、一トとろつながつた  
手を、もちあげて、そこへくると、  
せな、かあはせのおになり、  
こんどのうたは、  
へなべのく、そこぬけ、  
そこぬけたら、どんから、  
ト、いくひょうたひ、  
へそいれてたアもれ。  
ト、もとのやうにくぐりて、  
かごめく、にまたなるなり、



(注) 1) かごめかごめの曲を知る重要な資料で、これにより『童謡集』などの歌詞も理解できる。

図1) 万亭応賀著・静斎英一画『幼稚遊昔雛形』1844年  
〔尾原昭夫『近世童謡童遊集』(日本わらべ歌全集27),  
平成3年 柳原書店 p.81〕

り抜け遊びに発展するようならべうたであった模様である。上記2冊より後年の1844年に出版された『幼稚遊昔雛形』には、「かごめ」の遊びが「なべなべ」のくぐり抜け遊びへと連なるものであったことを示す図1のような挿絵も添えられていた。

しかしながらこれらはいずれも歌詞のみが残されているものであり、どのようなメロディーでこれらの歌が歌い継がれてきたのかということに近世に遡ってたどれる資料は見つかっていない。

明治期に入ると幼稚園教育の中で「かごめ」と題する唱歌や遊戯が盛んに扱われるようになることは『京阪神聯合保育会雑誌』の記事からも明らかである。例えば、「西区東江幼稚園唱歌及遊嬉」<sup>5)</sup>や「二市交換の唱歌材料」<sup>6)</sup>などの記事には「籠目」や「かごめ」「かごめ」というタイトルが見受けられ、これら「かごめ」をテーマとする唱歌や遊戯が教材として扱われていたことを物語っている。しかし楽曲の楽譜や出典は明らかにはされておらず、これらの曲をわらべうたの類か、或いは、新作の唱歌かに判別することは不可能である。

一方、近代学校教育制度が確立され、日本人の西洋音楽の手法に則った作曲の技能が向上してくると、幼稚園や小学校の唱歌及び遊戯科用の教材が盛んに創作されるようになる。そこでは日本に従来からある民衆歌の排斥とそれに代わる洋楽導入の影響で、従来のわらべうたも教育の現場から閉め出される傾向にあった。「かごめ」という主題に関しても、例えば白井規矩郎編『保育遊戯唱歌集』(明治26年)に見るように、従来のわらべうたを模しながら楽曲としてはG durの終止感を持つ譜例1のような「かごめかごめ」という曲が

新たに作られるようになった。歌い出しの「かごめかごめかごのとりは」という歌詞のみが、従来のわらべうたの「かごめ」を連想させるが、楽曲的にはわらべうたととは全く異なる西洋楽曲に属するものである。

歌い出しの「かごめかごのとりは」という歌詞のみが、従来のわらべうたの「かごめ」を連想させるが、楽曲的にはわらべうたととは全く異なる西洋楽曲に属するものである。



譜例1) 白井規矩郎『保育遊戯唱歌集』  
明治26年10月 pp.3-4

かごめかごめ  
かごめかごめ  
かごめかごめ  
かごめかごめ

の排斥に乗じた歌詞を改作する改良歌の運動をこのわらべうたの類にも見て取ることができる。

例えば、明治34年5月の『京阪神聯合保育会雑誌』には「唱歌の改作」として、

かごめかごめ かこの中の鳥よ 早くおきてあそべよ  
あけのころに トテコとないて 早く起きて遊べ<sup>8)</sup>

という替え歌詞が紹介されているが、早起きを推奨し、かつ良く遊べと説く歌詞は、『小学唱歌集 初編』(明治15年) 所載の「第十七 蝶々」の二番の歌詞「おきよおきよ、ねぐらのすずめ、朝日のひかりの、さしこぬさきに、ねぐらをいでて、こずえにとまり、あそべよすずめ、うたえよすずめ」に繋がるものと考えられる。即ち、これらの歌詞において詠われているのは勤勉という徳目に通ずるものであると言えよう。

このように学校教育の成立過程で盛んに行われた改良歌の教材化の影響は、この時期、わらべうたにも波及していたと考えられる。

その後、学校唱歌教育が軌道にのり、唱歌集の出版が盛んになると、次第に小学校の教授細目の中に「かごめ」という主題を持つ教材が見られなくなり、遊戯科目においても白井の「かごめ」に代表される題材だけをわらべうたから採ったかのような教材は姿を消していく。そして入れ替わりに、『文部省編纂尋常小学唱歌適用最新動作遊戯書』(秋山・栗田編、明治44年)をはじめとする一連の、文部省唱歌に動作をつけた遊戯書の出版が主流となっていく。

### 3. 明治から昭和前期の遊びうたとしての「かごめ」

しかしながら学校教育現場から離れた実際の子どもたちの生活の中では、明治期から昭和前

白井が『保育遊戯唱歌集』に収めた「かごめかごめ」は歌詞の一部に手を加えて、明治30年には『新編遊戯と唱歌』に「かごめ」として再録されるが、この白井の「かごめ」は実際の小学校教育の遊戯科目の中で教材として楽曲名が掲げられていたようである<sup>7)</sup>。しかしながらその音域や跳躍音程から考えると、実際の保育や教育の場で遊びを伴ってこの歌が使われていたとは考え難い。

わらべうたの旋律には依らない西洋楽曲の手法によって新たに作られた「かごめ」が、遊戯科目の教材として採用された背景には、近代学校教育が内容を伴って確立していく過程での教材編成の問題が垣間見られる。即ち、全く新しい楽曲によってではなく、少なくとも題材を子どもの実生活からとったものによる遊戯を通して西洋楽曲を受容させていこうという、いわば安易な和洋折衷の痕跡がここに見られるのである。

明治10年代からの卑猥な歌詞を持つ民衆歌

期に至る長い期間の中で一貫して、「かごめ」を主題とするわらべうたが、色々な歌詞や旋律のパターンで遊び継がれていたと推察される。

明治期のわらべうたの「かごめ」に関する資料としては、『日本全国児童遊戯法』(明治34年、昭和43年に『日本児童遊戯集』として覆刻)や『諸国童謡大全』(明治42年)などに多くの「かごめ」の歌詞が紹介されており、このわらべうたが広範囲の地域で、地域性を保ちつつ遊び歌われていたことが明らかである。

例えば、『日本全国児童遊戯法』には資料1, 2, 3のように伊勢、東京、下総地方で採取された各々の「かごめ」の歌詞が遊び方も添えて掲載されている。

資料1) 伊勢 資料2) 東京 資料3) 下総

<p>資料1) 伊勢</p> <p>籠目かごめ、籠の中の鳥は、いついつ出やる、夜明けの晩に、ツルツルこぼつた</p>	<p>資料2) 東京</p> <p>籠目かごめ、籠の中の鳥は、いついつ出やる、夜明けの晩に、ツルツルこぼつた</p>	<p>資料3) 下総</p> <p>籠目かごめ、籠の中の鳥は、いついつ出やる、夜明けの晩に、ツルツルこぼつた</p>
--	--	--

大田才次郎編『日本全国児童遊戯法』明治34年〔瀬田貞二解説『日本児童遊戯集』として覆刻(昭和43年 平凡社)より〕

また『諸国童謡大全』には以下のような「かごめ」の歌詞が掲載されている。

(東京)「籠目かごめ」

籠目かごめ、籠の中の鳥は、いついつ出やる、夜明けの晩に、ツルツルこぼつた

(信濃)「籠目かごめ」

籠目かごめ、籠の中の鳥は、何時何時出やる、十日の晩に、鶴亀ひきこめひきこめ

(信濃)「かごめかごめ」

籠目籠目、籠の中の鳥は、何時何時出やる出やる、十日の晩に、鶴と亀で出やる出やる<sup>9)</sup>

これら明治後期に採取された「かごめ」にはいずれも「なべなべ」の遊びに転化された形跡は見られない。同時に、現行の「後ろの正面だれ」の部分もなく、これらのことから少なくとも明治年間の「かごめ」の遊び方はまだ、背後の人あてを伴わないものが主流であったのではないかと推察される。

昭和期に入ると広島高等師範学校附属小学校内に設置された音楽研究部が「余りに西洋模範に因はれ」<sup>10)</sup> た唱歌教育への反動から、全国のわらべうたや民謡の調査に取り組む。そして全国に依頼し収集したわらべうた等を『日本童謡民謡曲集』に編纂し発行する。この時点で全国から寄せられた「かごめ」に類するわらべうたには譜例2の山口県熊毛郡のもののように「誰がうしろ」と現行の遊び方に近いものもある一方で、譜例3の愛知県三河地方のもののように地域性を色濃く残すものも存在していた。

<p>譜例2)</p> <p>かごめかごめ</p>	<p>譜例3)</p> <p>かごめかごめ</p>
---------------------------	---------------------------

広島高師附属小学校音楽研究部編『日本童謡民謡曲集』昭和8年〔昭和63年の柳原書店よりの復刊による〕

このように近代学校教育確立の主導者的な存在であった広島高等師範学校附属小学校において、西洋音楽主流の唱歌教育を見直し、わらべうたにより「郷土的、国民的感情」<sup>11)</sup> を育成しようという動きが起こったこと、そしてわらべうたのありのままの姿を収集し、

紹介しようとしたことは大変興味深いことである。しかしながらこの動きは全国的な規模やレベルで展開されることはなく、唱歌教育に大きな変革をもたらすには至らなかった。この広島高等師範学校附属小学校の試みとそれがある種の挫折を迎えたことは我が国の音楽教育の歴史にとって非常に大きな意味を持つと考えられる。

後の香人だ 一れ 猫と籠と つつべつた 夜明の眼に 何時何時で ある 籠の中の鳥 は かごめかごめ かごめかごめ	だあれがうしろ 朝日の光が やく時は 夜明や眠 何時出て 遊ぶ 籠の中の鳥 は かごめかごめ かごめかごめ	たーれがうしろ 夜明けの戦 にか たいがうしろ いついつ寺 の かごめかごめ かごめかごめ	かごめかごめ かごめかごめ かごめかごめ かごめかごめ かごめかごめ かごめかごめ かごめかごめ かごめかごめ
--	--	--	--

資料4) 上野甚作『庄内童謡集』  
昭和13年10月 pp.58-60

何故なら、上野甚作が昭和13年に出版した『庄内童謡集』には資料4のように、同じ村内からも異なる歌詞を持つ「かごめかごめ」が収集されたことが記されているように、戦前にはまだ地方によって様々な「かごめかごめ」の歌詞が存在し、その歌詞の相違などからおそらくそれに匹敵する量の様々な旋律も存在していたであろうと推察されるからである。戦前に教育界の中に、わらべうたの地方の独自性、流動性を指摘し、これらの意義を認める傾向が強まっていれば、今日の音楽教育の方向性と内容も大きく変わってきていた筈であると言っても過言ではなかろう。

#### 4. 戦後の音楽科教科書にみる「かごめかごめ」

戦前には明らかに地域の独自性を保っていた「かごめかごめ」のわらべうたが、現在、全国的に歌われているような歌詞及びメロディーに統一され始めたのは、昭和20年代後半から30年代にかけて小学校の教科書に現行

の「かごめかごめ」の楽譜が掲載されたことに依ると考えられる。

譜例4は昭和26年の学校図書株式会社の『わたくしたちのおんがく 2』に掲載された「かごめかごめ」であるが、この時点ではすでに現行とほぼ同様の歌詞及び旋律をもつ「かごめかごめ」の曲が紹介されていた。

かごめかごめ

日本童謡



かごめ かごめ かごめかごめ とりは  
いたついでやーる よあけのばんに  
つるとかめと すべた うしろのしめんどふれ

譜例4) 財団法人教育図書研究会編  
『わたくしたちのおんがく 2』  
(学校図書株式会社 昭和26年)

しかしながら同時期に、他の教科書中には譜例5や譜例6の楽譜のように終結部に譜例4とは異なる色々な歌詞や旋律を持つ曲も見られる。このことからこの昭和20年代後半という時期にはまだ諸種のバージョンのわらべうたが教授用教材として教科書に掲載される余地が残されていたと見るべきであろう。



譜例5) 日本児童音楽研究会編  
『よいこの音楽 4年』  
(大阪書籍株式会社 昭和28年)



譜例6) 弘田龍太郎編  
『新しい音楽 4年』  
(東京書籍株式会社 昭和27年)

また昭和31年に出版された学校図書株式会社の指導書の中でもこの曲の解説として、

この歌は主として関東地方でうたわれるわらべ歌であるが、所によっては「八日の晩に鶴と亀と出やる」「八日の晩に鶴と亀とつぺった」などいろいろ変って歌われる<sup>12)</sup>

と記され、かつ、

歌詞も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい<sup>13)</sup>と書かれている。従って、少なくとも昭和30年代初頭に至ってもなお、その地域性は保証されていた筈である。しかしながら指導書に資料5のように、このわらべうたの歌唱指導の目標が設定され、指導の段階や遊び方までが詳細に例示され、かつ評価の項目が明記されると、次第に教育現場ではこの指導書の内容

に沿った指導に傾いていったとしてもそれは当然のことであったと考えられる。そしてその結果、教育現場の中からは次第にわらべうたの地域性が失われ、やがて教科書の楽譜に示された歌詞とメロディーの「かごめかごめ」が全国津々浦々で歌われるようになっていったと推察される。

歌名	かごめ	かごめ	目	1 低い声で歌う技能を伸ばす。	2 リズムや音程を正しく歌う。	3 歌に合わせてリズム楽器を打つ	4 自由に動作をする。	5 この歌の遊びをする。	時	約2時間		
教科書	この歌は主として関東地方でうたわれるわらべ歌であるが、所によっては「八日の晩に鶴と亀と出やる」「八日の晩に鶴と亀とつぺった」などいろいろ変って歌われる。	編法	(6+4+2) に楽節の分析ができる。旋律は三つ、A(かごめ かごめ)の形、B(かごのなかのとりは)、C(いついつでやる)。この三つが A-B-C-A-(C+A+B)。	1 歌謡 1 聴く聞く。	2 リズム楽器で次の七つ打ちをさせる。	3 リズム反応 歌に合わせて遊戯をする。	4 歌謡 1 聴く聞く。	2 リズム楽器で次の七つ打ちをさせる。	時	約2時間		
学	2 子供達自由に歌わせる。	3 話し合う。	4 歌謡を正しく読む。	5 2小節ずつ聴いて歌わせる。	6 2小節ずつ交互に歌わせる。	7 グループまたは一人で歌わせる。	8 歌謡を正しく読む。	9 話し合う。	10 2小節ずつ聴いて歌わせる。	11 2小節ずつ交互に歌わせる。	12 グループまたは一人で歌わせる。	
活	1 歌謡 1 聴く聞く。	2 リズム楽器で次の七つ打ちをさせる。	3 リズム反応 歌に合わせて遊戯をする。	4 歌謡を正しく読む。	5 2小節ずつ聴いて歌わせる。	6 2小節ずつ交互に歌わせる。	7 グループまたは一人で歌わせる。	8 歌謡を正しく読む。	9 話し合う。	10 2小節ずつ聴いて歌わせる。	11 2小節ずつ交互に歌わせる。	12 グループまたは一人で歌わせる。
動	1 歌謡 1 聴く聞く。	2 リズム楽器で次の七つ打ちをさせる。	3 リズム反応 歌に合わせて遊戯をする。	4 歌謡を正しく読む。	5 2小節ずつ聴いて歌わせる。	6 2小節ずつ交互に歌わせる。	7 グループまたは一人で歌わせる。	8 歌謡を正しく読む。	9 話し合う。	10 2小節ずつ聴いて歌わせる。	11 2小節ずつ交互に歌わせる。	12 グループまたは一人で歌わせる。
の	1 歌謡 1 聴く聞く。	2 リズム楽器で次の七つ打ちをさせる。	3 リズム反応 歌に合わせて遊戯をする。	4 歌謡を正しく読む。	5 2小節ずつ聴いて歌わせる。	6 2小節ずつ交互に歌わせる。	7 グループまたは一人で歌わせる。	8 歌謡を正しく読む。	9 話し合う。	10 2小節ずつ聴いて歌わせる。	11 2小節ずつ交互に歌わせる。	12 グループまたは一人で歌わせる。
例	1 歌謡 1 聴く聞く。	2 リズム楽器で次の七つ打ちをさせる。	3 リズム反応 歌に合わせて遊戯をする。	4 歌謡を正しく読む。	5 2小節ずつ聴いて歌わせる。	6 2小節ずつ交互に歌わせる。	7 グループまたは一人で歌わせる。	8 歌謡を正しく読む。	9 話し合う。	10 2小節ずつ聴いて歌わせる。	11 2小節ずつ交互に歌わせる。	12 グループまたは一人で歌わせる。
二	1 歌謡 1 聴く聞く。	2 リズム楽器で次の七つ打ちをさせる。	3 リズム反応 歌に合わせて遊戯をする。	4 歌謡を正しく読む。	5 2小節ずつ聴いて歌わせる。	6 2小節ずつ交互に歌わせる。	7 グループまたは一人で歌わせる。	8 歌謡を正しく読む。	9 話し合う。	10 2小節ずつ聴いて歌わせる。	11 2小節ずつ交互に歌わせる。	12 グループまたは一人で歌わせる。
指	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
導	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
書	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
の	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
注	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
意	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
事	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
由	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
来	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
歴	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
的	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
考	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
究	1 歌う姿勢……素材に、歌うように。	2 注意する点	A 「でやる」ところの音の動きは、よく注意してなだらかに歌う。	B 一番終りの「だーれ」のところは、少し	C 「かごめ」の「ご」は鼻音音。	D 「いついつでやる」と歌う。	E リズム反応	歌謡も旋律も地方によって、ちがうから、その土地の歌詞と旋律を歌って遊んでもよい。	運く歌う。			
評	1 低い声で歌えたか。	2 リズムや音程を正しく歌えたか。	3 楽しく歌えたか。	4 歌に合わせてリズム楽器を打ったり、自由な動作をすることができたか。	5 この歌の遊びが楽しく行えたか。							

資料5) 財団法人教育図書研究会編  
『私たちの音楽2 指導書』  
(学校図書株式会社 昭和31年)

## 5. おわりに

小泉文夫は「かごめかごめ」を、「童謡曲集」とか「わらべうた集」など、楽譜の形でとり上げられ、教科書やラジオやレコードで逆に子どもに教えられたようなものは、『かごめ』『通りゃんせ』『あんたがたどこさ』などのように、決定版のようなものがある<sup>14)</sup>

というように「教科書やラジオやレコードで逆に子どもに教えられたような」わらべうた

の一つとして挙げ、子どもの中で自然のままに伝承され続けているわらべうたとの相違について触れている。この小泉の発言は、保育や教育の場でわらべうたを扱う際に、考慮すべき示唆に富むものであると思われる。

本研究で明らかにした「かごめかごめ」の学校教育現場における教材としての変遷は、この小泉の発言を裏付けるものでもある。ここで明らかにされた、わらべうたの「かごめかごめ」の教育という場における扱われ方の変遷は、ひとたび楽譜として出版されたり、教科書で扱われるなどすると失われてしまいがちなわらべうたの生命というものを深く捉え、どのように対峙すべきか考えることの必要性を教示していると言える。

〈付記〉本稿は2003年日本保育学会第56回大会における口頭発表（明治期以降幼稚園・小学校の教材にみる「かごめかごめ」の変遷）を基に論を発展させたものである。

## 註

- 1) 一例を示すと、筆者が平成14年度に行った学生への「かごめかごめ」の歌詞の書き取り調査によると、「かごのなかのとりは」を「通りは」、「よあけのばんに」を「番人」、「うしろのしょうめん」を「少年」と記述した学生がいた。さらにはごく一部ではあるが、幼少時に「いついつでやる」を「いついつJ R」と記憶していたと記述した者もいた。
- 2) 『学習指導要領』（平成10年12月）「第6節 音楽」には第1学年の共通教材として「ひらいたひらいた」（わらべうた）が挙げられている。また「唱歌教材については、共通教材のほか、長い間親しまれてきた唱歌、それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など日本のうたを取り上げるようにすること。」という一文も明記されている。
- 3) 太田全斎『諺苑』1797年〈尾原昭夫『近世童謡童遊集』（日本わらべ歌全集27）、平成3年、柳原書店、p.47〉
- 4) 釈行智『童謡集』1820年〈尾原昭夫『近世童謡童遊集』（日本わらべ歌全集27）、平成3年、柳原書店、p.58〉
- 5) 『京阪神聯合保育会雑誌』第2号、明治32年4月15日
- 6) 『京阪神聯合保育会雑誌』第6号、明治34年5月30日
- 7) 群馬県勢多教育会が明治35年に編纂した『教授細目』の第2学年第1学期用の「唱歌遊戯」中の「かごめ」の教材は、この書籍からとられたものと考えられる。
- 8) 「唱歌の改作」『京阪神聯合保育会雑誌』第6号、明治34年5月30日
- 9) 童謡研究会編『諸国童謡大全』明治42年9月、春陽堂
- 10) 広島高等師範学校附属小学校主事守内喜一郎のまえがき「『日本童謡民謡曲集』の編纂成る」広島高師附属小学校音楽研究部編『日本童謡民謡曲集』昭和8年〈昭和63年の柳原書店よりの復刊による〉
- 11) 「序」広島高師附属小学校音楽研究部編『日本童謡民謡曲集』昭和8年〈昭和63年の柳原書店よりの復刊による〉
- 12) 「歌曲の解説」財団法人教育図書研究会編『私たちの音楽2 指導書』学校図書株式会社、昭和31年
- 13) 「指導上の注意事項」財団法人教育図書研究会編『私たちの音楽2 指導書』学校図書株式会社、昭和31年
- 14) 小泉文夫「わらべうたはどのようにして育ってきたか」『音楽の根源にあるもの』平成6年、平凡社、p.100